

新しい時代の兆し

上 廣 榮 治

日本人はどうなってしまったのか、日本の将来はどうなるのかと案じられるようなニュースばかりが続きますが、はたして現実はどうなのでしょう。隣の部分があれば、必ず光の部分もあるはずだと思っていたところ、やはり、少し安心できる嬉しい情報がありました。

その一つが世界から見た日本の姿です。マスコミには「日本は世界で孤立している」とか、「アジアの人々は日本を嫌っている」という類（たぐい）の論評がしばしば登場しますが、イギリスの公共放送BBCがアメリカのメリーランド大学と共同で、世界の三十三か国、四万人を対象に行なった世論調査では、「世界に最も良い影響を与えている国」として、日本が第一位に選ばれたということです。

世界三十三の国のうち、実に三十一か国で日本を肯定する人々が否定的な人々を上回ったのです。日本を肯定する人が最も多かったのはインドネシアの八五％、ついでフィリピンの七九％です。一方、日本に否定的な二つの国とは、やはり中国と韓国でした。しかし、韓国の日本否定派は五四％なのに対して、肯定派も

四四%あり、希望が持てます。ところが中国では肯定一六%に対して、否定はなんと七一%という、不自然なほどの極端さです。その原因はともかくとして、この二つの国との問題を除けば、日本は世界で孤立しているところか、思った以上に、親愛され期待されているようなのです。これは素直に喜んでよいことでしょう。

もう一つ、日本の民間教育研究機関が行なった興味深い調査結果があります。東京、ソウル、北京、上海、台北の三歳から六歳までの子どもを持つ親、約六千人に対して行なった聞き取り調査の結果です。

「子どもに将来どんな人になってほしいか」という質問に対して、東京では「友人を大切にする人」、「他人に迷惑をかけない人」という親が七〇%を超えたのです。一方、上海では「他人に迷惑をかけない人」がわずかに四・六%、北京で四・九%と、中国では極端に低いのです。ソウルが二四・七%、台北が二五・一%で、上海、北京の五倍、東京の三分の一強です。

これとは反対に、東京で低くて韓国、中国、台湾の都市で高いのが、「まわりから尊敬される人」「リーダーシップのある人」などで、前者が東京の二倍から四倍に近く、「リーダーシップのある人」にいたっては、東京の六・一%に対して、ソウルでは四六・八%で、八倍近くにもなっています。

人に迷惑をかけず、友人を大切にする人になってほしい。そして、主導権を握ることはあまり望まない。これが日本の親が子どもたちに望む将来の姿だとすれば、日本人が、世界に良い影響を与えていると見られるのもうなずけます。

冒頭にあげた世論調査で「世界に悪い影響を与えている」と名指しされた第一位が、イスラム原理主義と核開発で問題になっているイランで、第二位が世界の警察といわれるアメリカなのです。どちらも強力なリーダーシップを発揮したがる国、自分たちの原理を絶対として、他を顧みることの少ない国です。

この調査結果を最近の学力低下などと合わせて、日本の子どもたちには「覇気がない」「向上心がない」、強国たらしめとして自己主張の強い近隣国に追い越されてしまう。だから「将来が心配だ」、そう考える人はいるでしょう。

しかし、私はそうは思わないのです。この調査結果を「ありのままに」受け入れて、しかも嬉しく思うのです。人に迷惑をかけない、友人を大切にする、リーダーシップにこだわらない。これは我が会という、愛和の精神の延長線上にある生き方です。そうであれば、こうした傾向は、さらに大いに伸ばしていつてほしいと願うのです。

将来を心配する人々は、日本を強国であれと願っているからです。しかし、自国の権益を押し通して世界中から嫌われる強国になど、ならなくてもいいと私は思うのです。どこの国にも迷惑をかけないように努めて、世界中から好ましく思われる。利益よりは倫理を大切に作る国であらうとする。それは、最も確実に、そして安全に、この難しい時代を生き延びる道であると信じるからです。

バブルの崩壊から十五年、私たちの社会は非常に困難な時期を少しずつ乗り越えつつあるようです。とりわけ、その発想と生活を大自然の摂理にそった方向に正しつつあるように思われます。

昨年、ある大手の飲料会社が二十代から三十代の男性サラリーマン千二百人を対象に朝の生活実態調査をしたところ、ここ二、三年の間に朝型に変わったという人が四〇%もいて、夜型に変わった人の二倍。また、夜型の人のうち、「朝型に変えたい」と希望している人は、七〇%近くに上っていたのです。

調査対象者の五三%が夜型だと答えていますから、まだまだ夜型の生活をしている人が多いのは確かです。しかし、そのほとんどが夜型の生活を快適だとは思っていません。万止むを得ず夜型の生活をしていても、できれば朝型に変えたい、早起きして健康な身体からだと心を取り戻したいと願っているのです。

こうした傾向を反映してか、早起きで自己実現をしようという類の本が何冊も書店の棚に並んでいます。また、インターネットで「早起き」を検索すると、三十万件以上もヒットします。早起き生活、早起きネット、朝の達人、早起き応援サイトなどなど、まるで私たちのサイトかと誤解しそうなほど早起きの効用を説くものが並んでいます。

なぜ、早起きがこれほど盛んになってきたのでしょうか。私には、バブル崩壊後の苦難の時期が多くの人に「本当の仕合わせ」とは何かを考えさせた結果だろうと、思われるのです。

バブル期には当たり前だった残業や夜のお付き合いが、経済の低迷で激減しました。いきおい早く退社し、夜早く寝て、朝早く起きることにあります。すると、ただそれだけで体調が好転し、希望や仕事への新鮮な意欲が湧いてきます。収入は減つても、働くことや生きることが楽しくなったのです。

家にいる時間が長くなって、家族との対話も増えてきます。そして「本当の仕合わせ」とは何だろうと考え始めます。バブル期に比べて、今のほうが幸福感があると気づいたときに、それをもたらしたものが早起きだったと気づくのです。

春の大会でお話したように、人間は大自然の摂理によって、早寝早起きの生活をすることで身体と心の健康が保てるように造られています。そのため「本当の仕合わせ」を実現するには、早寝早起きが第一の条件になるのです。

多くの人がそのことに気がついてきたのでしよう。早起きの効用と愛和の精神の大切さ、それが社会に静かに浸透しつつあるのです。これは新しい時代の兆しかもしれません。この好機を捉えて、一人でも多くの人に、「本当の仕合わせ」の入り口である「朝起き」をお伝えし、六十年にわたって培ってきた愛和実現のノウハウを社会に広めてまいりましょう。